

第 3 会 場

Ⅲ-1 説明的表現の指導

—「比較」に着目した場合—

大阪市立内代小学校 桜本明美

児童は、説明的文章を読んだり書いたりする学習をとおして、様々な論理的思考の方法を学んでいる。その実態を児童の作文をとおして見ると、「問答する」・「順序をたどる」・「物事の原因や理由を求める」などの思考が高学年段階ではほぼ定着していると言える。

しかし、説明的表現力を支える他の思考力も必要に応じて十分に駆使できるようにするためには、系統的な指導が考えられなければならない。

そこで、今回は、「比較」に着目した場合を取り上げ、その系統的指導についての試案を示す。さらに、試案に基づく実践面からの考察もおこなう。

Ⅲ-2 「筆者を読む」の実践的検討

東大阪市立弥刀東小学校 長崎伸仁

昨年の第77回学会の「『筆者を読む』の理論と実践」では、説明的文章指導で多少に関わらず「筆者」を意識させた読みをさせようとする輿水実氏、小松善之助氏、倉沢栄吉氏、青木幹勇氏、小田迪夫氏、森田信義氏の六氏を取り上げ理論的な側面からの考察及び整理を行った。

本発表では、私が提唱する「読みの目標からの系統化」（第76回学会課題研究で発表）の内の「筆者を読む」について、具体的な実践を提示し、説明的文章指導で「筆者を読む」ことの有効性を検討する。

更にそれが、読書指導や作文指導へと関連、発展していく可能性を秘めていることにも言及してみたい。

Ⅲ-3 国語科自己評価の試み

—中学校の場合を中心に—

お茶の水女子大学附属中学校 益地憲一

国語科の学習においては、感性や思考を重視する部分が多く、簡単に学習の成否を判断することができないということもあって、自己評価は困難であり、その信頼性は低いと見なされることが多かった。しかし、学習者が自身の内面的精神的活動を掘り起こし、自己吟味に立脚した学習活動を展開することは重要なことであり、そうした学習の蓄積が、自らの学習力の育成につながってくることは疑いのないことである。

本発表においては、生徒の意識調査や実践をふまえ、評価項目の精選と基準の充実、それに基づく評価カードの簡便化、毎時間ごとの反省記述と評価の日常化、他者評価による補完のあり方等に言及し、中学校国語科における自己評価の意義と有効性について考察したい。